

テレビジョン番組の撮影のため、九月前半の三週間弱、アイルランド国内を旅行した。このユーラシア大陸の西端にある島国はサハリン中部に相当する緯度にあるという位置を除外すれば、面積、人口、経済規模は北海道並であるが、それ以上に東端に位置する日本と数多くの類似した特徴をもつ国家である。

日本で人気のあるエンヤというアイルランドの女性歌手がいる。その歌曲が我々に昔懐かしいような気分をもたらすのは、音階が完全な七音音階で構成されておらず、四音や七音が使用されない日本の伝統音楽の音階に類似しているからである。そして明治時代に小学唱歌として選定された歌曲にもアイルランド民謡が多数あり、この百年以上、子供時代から馴染んできたという背景もある。

それ以外に、多神教的な宗教が社会に残存しているということでも類似している。アイルランド国民の九割はカソリック教徒であるが、五世紀頃にセント・パトリックが布教を開始する以前は動物、植物、河川など様々な自然に靈魂があるとする多神教的な宗教を信仰する民族であった。その名残は現在まで存続し、各地に妖精にまつわる伝説が存続しており、日本の神道などに相通ずるところがある。

しかし、すべてが類似しているわけではない。第一に小説家司馬遼太郎がアイルランド民族を「百敗の民族」と要約したように、紀元前一世紀にはカエサルに大陸から駆逐され、八世紀頃からはヴェイキングに襲撃され、一二世紀以後はイングランドに支配されてきたという過酷な歴史がある。だが不屈の精神で、一九世紀には衰退しつつあった固有の言語を復活させ、戦後に独立し、現在はケルティックタイガーといわれる経済発展を実現している。

そのアイルランドが言語の復活を画策していた時期に、日本は政治、軍隊、服装、音楽など、あらゆる制度や文化を欧米から導入し、固有の文化を変更しようとしていた。その反骨の精神と順応の精神の差異は現在にも継続されている。アイルランド全島、どこを移動しても写真になる伝統の風景が維持されており、類似の規模の北海道内のように、乱雑な景色がどこにもないのである。旅行の途中、その差異の原因を考察してみた。

第一は素材の地産池沼が徹底していることである。イングランド支配時代に大半の森林が燃料として伐採されたことも影響し、木材が豊富ではなく、住宅も公共施設も大半が足下の石材を利用している。そして新築の建物であっても伝統の様式で建設され、日本のように国外から輸入した鉄材、木材、セメントを使用し、勝手な形状の建物を建設するという愚行がない。その発想が風土に馴染んで、自然環境と異質になっていないのである。

第二は伝統を墨守していることである。首都ダブリンの一部に高速道路があるものの、全島の道路は両側の石壁とともに古来の施設を修復しながら使用している。日本であれば無理にでも拡張して街並を荒廃させてしまうのであろうが、ここでは田園地帯の道路も街中の道路も旧態依然である。しかし、それで滞するわけでもない。いわゆる地域経済維持のための無駄な土木工事がないのである。

環境問題が切迫してきた現在、自然環境を人類発展のための単純な手段と看做さない多神教的な思想は一層重要になり、その思想を現代にまで存続させてきたユーラシア大陸両端の島国の役割は期待されるものである。しかし、その対極にある文化伝統や社会基盤の維持の精神と方法については、日本はアイルランドを見習う必要がある。